

とを全然區劃を明かにせんならぬと思つたのが、抑々の間違ひである。何もそんな窮屈な事と言ふことはない、道徳と宗教とはその根柢に於て相接壤して居るものであつて、互に相交又し、重なり合つて居るのであるから「此處までは宗教ぢやから要らぬ」と言つて斷つたとき、そこに道徳の根柢は筈の根を斷られたと同じで、遂に生氣を失ふて萎びてしまふ譯ぢや。宗教を斷つて捨てたと思ふ時、道徳の根を斷つて居るので、それは非常な間違である。

試に諸君考へて見給へ、儒教の方に於ては道徳の根柢を何處に置いたか、孔子は天道にも置きになつて居る。それ故に或る弟子が「先生、あなたの道徳の物品の種は天道でございますナ」と言ひました時に、孔子は、天豈言はざらんや——天が大きな聲で言ふて居るのが聞えぬか、四時行り萬物生る——春夏秋冬の四時の大規律はこの通り運行して、千歳を経て少しも違つたことはない、又萬物は生々化育してこの通りに凡ての物が天の恵の中に活きて居る、即ち天はすべての物に規律を教へ、生々化育の慈

愛を與へて居るのである。斯の如き規律と慈愛とに服従し感謝する所が道徳の根柢である、この服従と感謝とを除つては道徳は無い。今の西洋で言ふやうに、自主とか權利とか要求とかいふ事が道徳だと思つて居るとき、人類の幸福は破壊されてしまふのである。慈愛に活さずして不平を懷き、感謝を捧げずして不満を懷き、すべての事に反抗の氣分を煽るとき、即ち人類の社會は破壊されて行くのである。徳目は種々あるやうぢやけれども、根本になるものは確乎不拔の規律に遵はなければならぬといふ事である、火を握つたら手が熱けるから、危ないツと言つて止める。それを「止めなくても宜いぢやないか、俺が勝手に手を焼くのだから……」さうぢやない、手が焼けてしまつたら字も書けなければ、飯も食へなくなる「構ふものか、俺の勝手だ」……それは精神病院へ入れてしまはなければならぬ、天則には遵はなければならぬ、遵はない者には従ふべく命ずる所が道徳の命令である、道徳だつても命令ぢや、法律で命ずるも道徳で命ずるも同じことである「斯くあれよ」といふのが道徳である、それに従は